炭

炭鉱〈基礎・歴史〉

# なぜ空知の石炭が必要だったの？

日本では、明治時代から蒸気機関車を動かす燃料として石炭が注目されました。また、家庭では暖房や調理にも利用され、昭和半ばまで生活に欠かせない燃料でした。さらに鉄をつくるためには石炭（コークス）が必要です。その石炭を地中からほり出し、生産していたのが「炭鉱」です。

## ◆炭鉱ってどんなところ？

炭鉱は石炭をほっている鉱山のことです。地下に向かうトンネルをつくり、地中の石炭を地上に運び出していました。その作業は重労働で、坑内（炭鉱内）ではガスの発生やトンネルがくずれる事故も多く、命がけの仕事でした。

炭鉱で作業しているようす（赤平の炭鉱）



## もっと知りたい！「炭鉱図鑑」

### 「炭鉱のしくみ」

空知には、地下1200mくらいの深さまで開発した炭鉱もあります。出入口と石炭をほる現場「切羽」を結ぶ連絡通路を「坑道」といいます。垂直にほられた「立坑」では、ケージ（エレベーター）で昇り降りし、ななめや水平につくられた坑道にはレールがしかれ、人は人車で移動し、石炭は炭車で運んでいました。

ズリ山とは、石炭といっしょにほられた石などを積み上げた場所

### 「石炭」

石炭は、大昔の木やシダなどの植物が地中にうもれ、地球内部の熱や圧力によって黒くかたい石のように変化したものです。おもな成分である炭素が多いほど、熱量が高くなります。質の高い石炭の表面はキラキラと輝き、ほればほるほど石炭が売れ、炭鉱で働く人々の暮らしが豊かになったので“黒いダイヤ”とよばれていました。

## ◆石炭はどうやって、ほり出すの？

炭鉱が開かれた最初のころは、ツルハシなどの道具を使ってほっていました。ほった石炭は、カゴに入れて人が背負ったり、トロッコを馬にひかせて運んだ時代もありました。

やがて機械化が進み、手で持つことができる採炭機械や、石炭の壁をくだくような重機ドラムカッターを使うようになり、ベルトコンベヤーに石炭をのせて運び出すようになりました。

旧三菱美唄炭鉱の竪坑やぐら

## ◆空知には、いくつ炭鉱があったの？

1879（明治12）年、いまの三笠に幌内炭鉱ができました。その後、赤平、歌志内、夕張、上砂川、芦別と、空知に次々と炭鉱ができていきました。やがて、国内でも大量の石炭をほり出す産炭地となり、最も栄えていたときは100以上の炭鉱があり、80万人以上の人が暮らしていました。